

「勇氣」の人間学的考察

松 田 高 志

Summary

Anthropologische Betrachtungen über den "Mut"

Takashi Matsuda

Bei Platon gilt der Mut als eine von vier griechischen Kardinaltugenden, d.h. als Tugend des Thymós, der zwischen dem begehrenden Teil und dem vernunftgemäßen Teil der menschlichen Seele liegt. Da seine Philosophie den sogenannten Dualismus vertritt, wird der Thymós wie der Mut als seine Tugend negativ aufgefaßt.

Dagegen behauptet Nietzsche die Philosophie des Lebens, das Vernunft und Begierde in sich vereint, indem er den Dualismus von Platon verleugnet. Bei ihm kann der Mensch durch den Mut alle Tiere überwinden und wird dadurch zu solchem Seienden, das zugleich den Menschen-Schmerz, d.h. den Schwindel an den Abgründen überwinden soll. Deswegen kann der Mensch ohne Mut nicht existieren. Weil "Mut" bei ihm als Kern des Lebens gilt, kann man seine Lebensphilosophie als "Philosophie des Mutes" nennen.

In seinem Buch: "The Courage to Be" hat Paul Tillich Nietzsches "Philosophie des Mutes" übernommen und behauptet: "Mut ist die Selbstbejahung des Seienden trotz des Nichtseins." Im Gegensatz zu Nietzsche, der den Gottestod verkündigt hat, anerkennt er den Mut des Menschen in der Beziehung mit der Transzendenz, die er den "Gott über Gott" bezeichnet. Vom umfassenderen Gesichtspunkt her sieht er im Mut etwas Grundsätzliches für den Menschen.

Das lateinische Wort "cor", von dem her das englische Wort "courage" stammt, bedeutet eigentlich das "Herz". Der amerikanische Psychologe Rollo May sagt deshalb, daß "courage" andere Tugenden genau so zur Geltung bringt, wie das Herz durch Blutumlauf andere Organe lebendig macht.

Da sich das Moralische und die Lebensschwungkraft im Mut vereint, befreit sich der Mensch durch den Mut von der Egoität (Selbsterhaltungstrieb), überwindet den "Schwindel an den Abgründen" und bringt Freiheit zur Geltung. Man fühlt einerseits den Mut von der Tiefe in sich her vorquellen, aber man wird andererseits dessen inne, daß der Mut einem als Gnade geschenkt wird.

Es ist tatsächlich eine sehr interessante Tatsache, daß die Ermutigung dort entsteht, wo der Mut auch vom Anderen erweckt und erstärkt wird, obwohl er zunächst und zumeist spontan ist und einen einsam macht. Deswegen bleibt Mut und Ermutigung immer ein wichtiges Thema der Erziehungswissenschaft sein.

序

何か危険なことに對し、傷つくことや失敗を恐れず立ち向かっていくには、大きな勇気が必要である。しかし大して危険なように見えなくても、本人にとってはずいぶん勇気があることもある。自分の理想や願い、あるいはすべきであると思うことを実行し、実現するには大抵勇気が必要である。それがどのような結果になるか分からず、どのようになってもその結果を自分の責任として引受けなければならないからである。本人がいかにやりたいことであっても、不安や心配のために逡巡しがちである。傍らで見ていて、やりたいことであるのにどうしてそんなに逡巡するのか不思議に思うこともある。しかしそのようなことへの勇気を欠くならば、自己実現なき人生になってしまう。

又、ありのままの自分を受け入れるのも、勇気が必要である。弱さや欠点のある自分、良くない思いを持つ自分、要するに「イヤな自分」を丸ごと自分として認めることは、相当の勇気が要る。同じことであるが、他人の目を気にしてありのままの自分を隠したり、違うように見せたりしないというのもずいぶん勇気が要る。しかしこのような勇気なしには、地に足のつかない、空回りの人生になってしまう。

更に又、今までの自分のあり方や価値観を否定する、あるいは違うものに変えるというのも勇気が要る。それがいかに正しくないかが分かっている、それに安住し、それで生きて来た以上、落ち着けるといふ保証のない新しい所にわざわざ「飛び込む」ということは、そう簡単なことではない。やはりすっかり行き詰まり、これ迄のあり方や価値観を変えないと自滅する他ないという所まで行かないとなかなか自分を変えることはできない。しかしこのような自分を変える勇気なしには、不本意な自分に留まるしかない。

このように考えると、自分が自分であろうとすることは、実は大変なことであり、そしてその為には、どうしても勇気が必要である。もしもこのように言えるのであれば、勇気とは、人間にとって一体何であるのか、又、そのような人間とは、一体どのような存在なのか、を問わなければならないであろう。このような「勇気」への人間学的問いは、「人間とは何か」を考える一つの重要な手懸かりになるように思われる。

(一)

「勇気」を意味する英語の *courage* の語源は、ラテン語の *cor* であるが、「羅和辞典」(研究社)によれば、*cor* は、1. 心臓、2. 心、3. 情、感情、気持、4. 勇気、気力…となっている。フランス語の「勇気」は、*courage* の他に、*cœur* があるが、これはラテン語の *cor* と同じで、心臓、心、勇気を意味している。「勇気」を意味するドイツ語の *Mut* は、英語の *mood* と同じ語源から来ており、心 (の動き)、情調等を意味している。*Großmut* (おおらかさ)、

Kleinmut (小心) 等々の言葉がある。更に英語の heart も take heart と言えば「勇気を出す」という意味になり、又、heart と同語源のドイツ語の Herz も Herz haben と言えば「勇気がある」という意味になる。日本語の場合、「勇気」と似た言葉に「度胸」というのがあるが、度というのは、やはり大度、度量というように、心を意味している。

このように幾つかの違う言語において、同じように、心臓とか心を表す言葉が「勇気」を意味するというのは、大変興味深い事実である。このことについて、例えばアメリカの心理学者 ロク・メイは、次のように述べている。「courage という単語は、heart を意味するフランス語の cœur と同じ語源から来ている。このように、ちょうど心臓が、腕や脚や脳に血液をポンプで送り、あらゆる身体の器官を機能させるように、勇気は、あらゆる心の徳を生かす働きをする。勇気なしには、他の諸々の価値あるものも、いのちを失って単なる徳の複製になってしまう。⁽¹⁾」

これは、比喩的な言い方であるが、興味深い解釈である。無論別な解釈も可能であるが、ともかくこのような言語上の事実から言っても、「勇気」は、あれこれの徳目の一つというよりは、あらゆる徳の根本にあるものだとすることが予想される。

(二)

ギリシャ語の「徳」を表す aretē は、もともと勇気を意味していた。ラテン語の「徳」を意味する virtus も、兵士、勇士を意味する viv から来ており、勇気、男らしさという意味をもっている。これは、自分の命をかけて、子女や仲間のために闘う戦士のうちに最も顕著に人間の善さ、卓越さを見たからであろうか。戦争の絶えることのない時代にあって、意識的に「勇敢さ」が強調される必要があったからか。

aretē や virtus という「徳」を表す言葉の原初の意味が、「男らしさ」であり、「戦士の勇気」であるということは、又男性優位社会、更に言えば武人優位社会を反映しているとも言える。しかしそのような言葉が、ともかく「徳一般」を意味するようになるということは、心理的に是認する何かがあったと考えてよいのではないだろうか。

「勇気」についての最古の議論は、プラトンの対話篇『ラケス』であろう。「勇気」のギリシャ語 andreia は、ラテン語の「勇気」を表す fortitudo と同じく、「男らしさ」を意味しているが、『ラケス』では、まさに将来戦士になる少年の教育の問題として議論されている。プラトンにおいては、他に対話篇『国家』で「勇気」が議論されていることは、よく知られている。ここでは、「勇気」は、「知恵」、「節制」、「正義」と共にいわゆる四元徳の一つとして考えられている。従って「勇気」は主要な徳として考えられているが、しかしその中心というわけではない。ただプラトンは、「勇気」の特別な性質というものに注目している⁽²⁾。

『ラケス』においては、ソクラテスに「勇気」とは何かを問われたラケスが、問答の末に一種の忍耐力であると答えるが、「勇気」が美しいものであるとすれば、「無思慮な忍耐力」より「思慮ある忍耐力」の方が美しい筈であり、「思慮ある忍耐力」こそ「勇気」であることに

なる。しかし見通しがきいて、見込みのある「思慮ある忍耐心」は、「勇気」とは言わないので、ラケスはアポリア（論理的難点）に陥る。ソクラテスに問答をしかけられたもう一人のニキアスは、「勇気とは、恐ろしいものと恐ろしくないものについての知である」と答える。それは、「未来の悪と未来の善についての知」と言い換えられるが、医術は、それが知である以上、健康について現在も、過去も、未来もどのように生じるかについて知っていなければならないのと同じように、「勇気」も知である限り、未来の善と悪だけではなく、過去、現在のことも知っていなければならない筈である。しかしそうなると、徳の一部分としての勇気とは何かを説明することにはならないので、ニキアスもアポリアに陥る。

対話篇『ラケス』は、「勇気」について知っている筈の二人の代表的「勇士」が答えられないままで終わる。しかし『ラケス』において承認されたことの一つは、無知で恐れ知らずの者を「勇気がある」とは言わないということであり、もう一つは、「勇気」は単に知ではないということである。ここに、「勇気」の特別な性質が見られている。「勇気」は、知が必要であるが、しかし知ではおさまらない何かである。

『ラケス』では、「勇気」を定義することに失敗したが、『国家』篇では、ニキアスの答えを発展させた形で、「勇気」は、「恐ろしいものとそうでないものについての正しい、法にかなった考えをあらゆる場を通じて保持すること」と定義される。「保持」とは、「苦痛のうちにあっても、快樂のうちにあっても、欲望のうちにあっても、恐怖のうちにあっても、それを守り抜いて、投げ出さないということだ。」と言われる。

国家の四元徳である「知恵」、「勇気」、「節制」、「正義」は、又個人の四元徳として考えられている。国家の三つの階層のうち、支配者としての哲人の徳は「知恵」、軍人の徳は「勇気」、庶民の徳は「節制」、その全体の調和が「正義」であるが、個人においても魂の三分説により、理知の部分の徳は「知恵」、気概の部分は「勇気」、欲望の部分は「節制」であり、その全体の調和がやはり「正義」と考えられている。

この魂の「気概」thymós（ラテン語の、呼吸、生氣、魂を意味する anima に相当する）は、理性と欲望の中間にあって両方にまたがっている。『ラケス』では、「勇気」は定義できず、ただその特別な性質が予想されただけであるが、それは、この「中間にあって、両方にまたがる」ということである。このことは、「勇気」を考える上で、重要な点であると思われるので、後で又検討したい。

ところで、プラトンの説と並んで、アリストテレスの「勇気」論が有名であるが、これについても触れておかねばならない⁽³⁾。アリストテレスによれば、「勇気」は、「恐れと平静の情の中間性であり、……平静である点で度を越えるものはむこうみずなひと……、恐れをもつ点で度を越え、平静である点で不足するものは臆病なひとである。」

つまりアリストテレス持説の中庸論から、「勇気」は、「むこうみず」と「臆病」の中間として考えられている。アリストテレスは、プラトンの、恐れは「悪の予期」であるとの定義を引用し、不評、貧困、病気、友のないこと、死という悪いものに対し、勇気あるひとは、その全てを恐れなければならず、例えば不評を恐れる、不評を恐れないのは醜く、恐れるのは美

しいからであると述べている。そして、勇気ある人は、どのような恐ろしいものにかかわるかと言えば、それは死である、但しあらゆる場合の死ではなく、もっとも美しい場合の死である、それは戦さにおける死であると言っている。従って、勇気ある人とは、美しい死をめぐって、つまり戦さにおける死の危険を恐れることのない人である。ここでも、「戦士の勇気」が「勇気」の典型と考えられている。ただ、注目すべきことは、勇気ある行為は、美しさのためであるということである。「美しい」を表す *kalos* は、英語の *noble, fair, right, good* を意味する。知識や技能の自信から、又は激情から、あるいは無知や楽観からの行為は、いかに勇気があるように見えても「勇気ある」とは言わない。ただ美しさの故に、高貴さの故に恐ろしさに立ち向かう行為のみ、「勇気ある」と言われる。美しさとか高貴さの故に、というのは、一体どういうことか、これも又後で考えることにしたい。

(三)

「勇気」について考える際、どうしても取上げなければならないのは、ニーチェである。ニーチェの哲学は、ある意味で「勇気の哲学」と言ってもよいであろう。その主要な概念である「超人」、「権力への意志」、「運命愛」、「永劫回帰」のいずれをとっても「勇気」を抜きにしては考えられない。

ニーチェは、実際「勇気」という言葉を誰よりも頻繁に使った哲学者であろう。「勇気」を表すドイツ語は、先に述べたように *Mut* ともう一つ *Tapferkeit* がある。ニーチェにおいては、いずれもよく使われている。O. F. ボルノーは、*Mut* と *Tapferkeit* の違いについて述べているが⁽⁴⁾、日本語の「勇気」や英語の *courage* は、一応その両方の意味を含んでいるものとして、ここでは特にその違いを問題しないことにする。

『ツァラトゥストラはかく語りき』(以下『ツァラトゥストラ』と略記する)の中で、『「何が善いのか」と君たちは尋ねる。勇敢 *tapfer* であることが善いことだ。⁽⁵⁾』と言われ、又「劣悪とは、それは臆病のことだ!。⁽⁶⁾』と言われる。この緊迫した雰囲気は、『ツァラトゥストラ』の全編を貫いている。『ツァラトゥストラ』の中で「勇気」について語られている最も重要な箇所と思われるのは、次の所である。長くなるが、引用したい。「しかし私の中に、私が勇気 *Mut* と呼ぶところのものがある。それは、これまで私のあらゆる不機嫌 *Unmut* を打ち殺してくれた。……すなわち勇気は最上の殺戮者である、攻撃的勇気というのは。……ところで人間は、最も勇気ある動物である。それによって、人間はあらゆる動物を超克したのだ。軍楽を響かせながら、人間はなお又あらゆる苦痛を超克したのだ。ところで人間という苦痛 *Menschen-Schmerz* は最も深い苦痛だ。勇気は、深淵を前にしためまいをも打ち殺す。そして人間は、一体どこで深淵に臨まない所に立ちうるだろうか? 見る事自身、深淵を見ることではないか。……勇気は、最上の殺戮者である。攻撃的勇気というものは。この勇気は、死をも打ちのめす。というのも、この勇気は、こう語るからである、『これが生であったのか? それでは、もう一度!』⁽⁷⁾」

ニーチェの語る「勇気」は、プラトン、アリストテレスと同じように、雄々しい武人的な響きがある。ニーチェ哲学の最も重要な概念の一つである *Wille zur Macht* は、「権力への意志」と訳されるが、しかしそれは、単なる強さへの意志ではなく、あくまで精神的強さ、更には精神的の高貴さへの意志を意味するであろう。ニーチェは、総じてキリスト教的道徳を否定したが、しかし「誠実さ」*Wahrhaftigkeit* は、受け継ぎ、むしろ徹底させたと言われる。従ってニーチェの「勇気」は、単なる雄々しさ、勇猛さではなく、いわば能動的誠実さとも言えるものである。

ただ、ここで注意すべきことは、ニーチェの「勇気」は、あれこれの徳目の一つではなく、人間の根本的あり方を可能にするものとして考えられているということである。ニーチェにおいては、人間は停滞する存在ではなく、常に自己を超えて行く存在である。それは、常に深淵に差しかけられていることを意味する。人間は、「深淵のめまい」という苦痛に打ち克つていかねばならない存在である。「人間は、動物と超人との間に結びつけられた一本の綱である、一深淵の上にかかる一本の綱である。一個の危険な *Hinüber* (向こうへ超え行くこと)、一個の危険な途上……。」⁽⁸⁾ 「勇気」なしには、人間は人間としてありえないのである。これは、ニーチェ哲学の全体を貫いている考え方であると言ってよいであろう。

(四)

このように、「勇気」は人間の根本的あり方を可能にするという考えを主題的に論じたのは、ティリッヒの『存在への勇気』“*The Courage to Be*” (ドイツ語版 “*Der Mut zum Sein*”) である。ティリッヒは、次のように述べている。「存在への勇気は、人間が、その本質的自己肯定に矛盾する実存の諸要素があるにもかかわらず、自分自身の存在を肯定する倫理的行為である。」⁽⁹⁾ 従ってこの「勇気」について次のように言われる。「勇気は、倫理的現実 *reality* である。しかしそれは、人間の実存の全範囲に、そして究極的には存在そのものの構造に根差している。それは、倫理的に理解される為には、存在論的に考察されなければならない。」⁽¹⁰⁾

ティリッヒは、二十世紀の代表的キリスト教神学者であるが、ニーチェの「勇気」を誰よりも高く評価し、それを存在論的に意義あるものとして仕上げようとした。周知の通り、ハイデッガーは、「どうしてもそもそも存在するものがあって、何も無くてもよいのにそうでないのか？」という根本的な問いに気づくことこそ、人間が経験する驚異中の驚異であるとしつつ、次のような有名な言葉を述べている。「不安という無の明るい夜に初めて、存在するものそのものの根源的な開けが生じる。つまり存在するものが在って一無ではないということが。」⁽¹¹⁾ 不安、つまり無(非存在)に脅かされて初めて、存在するものが(無くてもよいのに)在る!ということの不思議さに気づくのである。この驚きは、哲学を始めさせるだけでなく、又哲学を続けるよう鳴り響いているのである。

存在するものが在るということを感じさせる不安は、他ならぬ自分自身が常に無の中にすべり落ちていくという自覚である。これは、ニーチェの「深淵のめまい」として言われたことで

ある。この非存在の脅かしの中で、在ることに驚くことは、存在論的問いの根源であるが、人間存在の根源的境位としての非存在の脅かし「にもかかわらず」in spite of、人間の存在を可能にするのは、「存在への勇気」である。従ってこの「勇気」は、倫理的に考えられる前に存在論的に考えられなければならないのである。

ティリッヒは、非存在の脅かしとして具体的に死、無意味さ、罪過等を挙げているが、特に罪過に関連してニーチェにはない「勇気」論を新たに展開している。それは、『存在への勇気』の終章において取り上げられている「勇気と超越」の問題である。ニーチェにおいては、「神は死せり」という人間の根本的境位においてなおかつ人間の肯定的あり方を可能にするものが「勇気」であった。より積極的に言えば、人間の「勇気」ある生き方を否定するような「超越」は、ニーチェによって一切否認されたのである。要するにニーチェにおいては、「勇気」と「超越」は両立しえない。

それに対し、ティリッヒは、ニーチェの「勇気」を承認した上で、更にそれを超える「勇気」を可能にする「超越」との関係性を認めるのである。その「超越」は、もちろんニーチェによってその死を宣告された神ではない。ティリッヒ自身の言葉で言えば、「神を越える神」The God above God、又は「存在それ自身」Being itselfである。ここでは、詳細な神学的議論は避けて、ティリッヒの主張のおおよその方向だけを見ておきたい。

ティリッヒの、「超越」との関係における「勇気」は、「受容されえないものであるにもかかわらず、受容されているものとしての自分自身を受容する勇気⁽¹²⁾」(「受容を受容する勇気」)である。回りくどい言い方ではあるが、「これは、『信仰義認』のパウロ・ルターの教義の純粋な意味である。⁽¹³⁾」と言われる。

ニーチェの「勇気」は、既に述べたようにいわば能動的誠実さの徹底とも言えるものであった。そこでは、一切の無意味さにもかかわらず、敢えて誠実さを貫くという非合理的とも言える精神の高貴さが、いわば隠れた形で最後の存在根拠となっていた。ティリッヒの「勇気」は、もはや精神的高貴さにその存在根拠を持たない。ニーチェの立場からすれば、「勇気」とは見なされないものである。この点に関し、ティリッヒが言わんとすることのおおよその方向を示すために次のように言ってよいであろう。

他に依存しないというあり方には、大きな「勇気」が必要である。しかしか他に依存しまいと決意しても、否、そうであればあるほど、もともと他によって一方的に生かされていることに気づかざるをえない。他に依存しまいという「勇気」を持ちつつ、なおかつ他によって一方的に生かされているという事実を受け入れることは、決して矛盾ではない。実際にありうることである。但しそれには、これ迄とは違う「勇気」が必要である。

同じように、精神的高貴さとしての誠実さの徹底は、大きな「勇気」が必要であるが、しかし誠実さに徹すれば徹するほど、実は不誠実な自分に気づくのである。しかもそのような不誠実な自分がそのまま一方的に生かされていることを認めざるをえないのである。誠実さに徹する「勇気」を持ちつつ、更になお不誠実な自分がそのまま一方的に生かされていることを受け入れることは、矛盾ではない。そのような事実を受け入れるには、最後の「勇気」ともいうべ

きものが必要である。これは、誠実さを貫くというニーチェ的「勇気」を含みつつ、精神的高貴さという内なる存在根拠を放棄する「勇気」である。ティリッヒの「受容を受容する勇気」というものは、おおよそ以上のような方向において考えられるのではないだろうか。

ティリッヒにおいては、「勇気」は、無神論の徹底であるニーチェ的なニヒリズムにおいてその究極的意義があるのではなく、一層包括的な立場においてその存在論的意義があると考えられている。ここでは、「勇気と超越」の問題について不十分にしか述べることができなかったが、後でこの問題についてもう少し触れることにしたい。

(五)

これまで幾つかの代表的な「勇気」論を見て来たが、これらを踏まえながらおおよそ三つの点について人間学的に考えてみたい。

「勇気」は、「勇気を持つ」とか「勇気を出す」と言われるが、又「勇気が出る」、「勇気が湧く」とも言われる。つまり「勇気」は、生命的、力動的面を持っている。W. ロッホは、ベルグソンの“elan vital”を念頭に置きながら、「勇気」は「生の躍動力」Lebensschwungkraftと言ってよいと述べている⁽¹⁴⁾。「勇気は、常に本質的、必然的に生命的 vital である。それはバイタリティの感情である。⁽¹⁵⁾」 ロッホは、「生命躍動的勇気」Vitalmut と倫理的、キリスト教的「勇気」を分けるべきだと主張するヘンツ Hubert Henz に対し、「ヘンツがここで『生命躍動的勇気』の特徴として取上げているものは、勇気一般にあてはまる。⁽¹⁶⁾」と反論している。「勇気」にもいろいろあるが、確かにどのような「勇気」も、生命躍動的な面があると言ってよいであろう。ティリッヒの「受容を受容する勇気」も又、いわば最後の生の跳躍とも言うべきものがある。ともかく生命的躍動の全くない「勇気」というものは、考えられない⁽¹⁷⁾。

しかし「勇気」は、もちろん無方向な生の躍動ではない。ニーチェの「勇気」は、いかにデモニッシュな面が強調されても、「誠実さ」、「正直さ」の徹底であることに変わりはない。一般に「勇気」と「蛮勇」（ないし「猪勇」）は区別されるが、それは、「勇気」が理性的、道徳的であると考えられているからである。しかし「蛮勇」と言えども、勇ということが含まれる以上、単なる「向こう見ず」、「大胆さ」とは違って、何らかの道義のためというところがあるのではないだろうか。無論その理性面が、不十分であったり、その行動が、粗暴という印象を与えるにしても。プラトンやアリストテレスは、「勇気」は美しいものでなければならないとか、「勇気」ある人は「美しさのために行為する」と言ったが、この美しさが道義的美しさ、精神的高貴さを意味する限り、それは決して古めかしい考え方ではなく、「勇気」の本質を言い当てているであろう。

従って、「勇気」は、生命躍動的な面と広い意味で道義へと向かう面が一つになったものと考えられる。プラトンは、まさに「勇気」の特別な性質を理知と欲望の中間にあって両方にまたがっている「気概」thymós として語った。但しプラトンは、その哲学全体において「勇気」ないし「気概」をそれほど重要な、意義あるものとして展開していない。むしろその哲学は、

周知の通り二元論哲学の代表と見られる通り、理知と欲望の両方にまたがる領域というものは、単に消極的な意味しか持ちえなかったのである。

これに対し、ニーチェの「生の哲学」は、プラトンに対して言えば、二元論哲学の徹底的な否定であり、中間的な領域と言われた「気概」 thymós の領域を逆に中心的なものとして積極的に考えたと言える。つまりニーチェの「生」 Leben は、決して無方向な、渾沌としたエネルギーではなく、デモーニッシュなものとして理知を一つにしたものである。「勇氣」は、そのような「生」の中核にあるものとして考えられている。

西谷啓治は、『根源的主體性の哲學』の中で次のように述べている。『凡そ人浩然の気なれば、才も智も用に立つ者にあらず。この気は血気客気にあらず。人の本心より靄然として湧出し云々』(松陰)といふ如き『気』は、恰もプラトンの国家の基礎概念ともなされた心の三部分、即ち理性と気概と欲望のうち、中間の『気概』が反って上に『理性』をも包む如き高次の立場を顕はし来り、下に『欲望』の領域にまで降りつつ、欲望に代って生の生命として働くものとなったかの如くである。⁽¹⁸⁾

周知の通り、『論語』や『中庸』等には、知、仁、勇の三つの徳が並べて論じられているが、『孟子』では「勇の最も正大なるもの⁽¹⁹⁾」である「浩然の気」が、特別なものとして考えられている。上の引用文中の松陰の言葉にもそれがうかがえる。孟子は次のように言う。「(浩然の気は) ことばで定義することは困難だ。浩然の気というのは、何物よりも大きく、どこまでもひろがり、何物よりも強く、ちっともたわみかかむことなく、まっすぐに育ててじゃまをしないと、天地の間にいっぱいになる。また、この気というのは、義と道とから離れることはできない。……浩然の気は、義を行つたのが積み重なって発生したものであり、義が浩然の気を突発的に取り込んだのではないのである。⁽²⁰⁾」

「浩然の気」は、義を行うことによって養われるものであり、勝手にどうこうできるものではない。それは、何ものよりも大きく、強くなるが、しかし瞬時も義と道から離れることはない。この「浩然の気」と「勇氣」をいきなり同じものとして論じることはできないが、しかし西谷啓治が示唆するように、「浩然の気」は、理性と欲望を一つに含む「気概」として、「勇氣」を考える際の一つの展望を与えてくれるものではないだろうか。

(六)

もう一つの点は、これ迄特に触れなかった問題である。「勇氣」は、危険も不利益も自分一人で引き受けるという覚悟を意味しているが、それは、自分の心の奥底からという勝れて自発的なものであると共に、又全く自分一人でという孤独な営みである。しかし興味深いことに、「勇氣」は又他者によってひき起こされたり、強められたりする。つまり「勇氣づけ」Ermutigung, encouragement が起こるのである。

「勇氣」は、自分の心の奥底からのものであり、又全く他に依存しない心のあり方であるが、しかし「勇氣づけ」は、他者による働きかけであり、実際他者によってなされる。「勇氣づけ」

は、日常的によくあることであり、自明のことのようであるが、考えれば不思議なことである。これは、人間の「個」ということ、又「主体性」ということを考える際に、大変興味深い視点を与えてくれる。人間は、「個」とか「主体性」の最も内奥の所で、他者といわば響き合い、影響し合うということである。

ところで、相手を勇気づけようとして、必ずしも「勇気づけ」が起こるわけではない。むしろ無意識に言ったことや行ったことが、「勇気づけ」になることがある。従って、「勇気づけ」は、能動の形よりも、受動の「勇気づけられる」という事実において意味を持つとも言える。しかしそれでは「勇気づけられる」ということは、どういう時に起こるのだろうか。おそらく他者が本気で生きている、つまり真に勇気を持って生きていることが疑いなくストレートに自分に感じとれる時に起こるのではないだろうか。仮に相手を勇気づけようとしても、そうする本人が本気で生きていなければ、「勇気づけ」は起こらない。

周知の通り、内村鑑三は、『後世への最大遺物⁽²¹⁾』という講演の中で、後世に遺すことができるものとして、お金や事業や著述、教育等が考えられるが、しかしその最大のもの、しかも誰もが遺すことができるものは、「勇ましい高尚なる生涯」であると述べている。内村は、「勇ましい高尚なる生涯」の内容として、「此の世の中は是は決して悪魔が支配する世の中にあらずして、神が支配する世の中であると云ふ事を信ずる事である。失望の世の中にあらずして、希望の世の中であることを信ずる事である。此の世の中は悲歎の世の中ではなくして、歓喜の世の中であるといふ考を我々の生涯に實行して、其の生涯を世の中の贈物として此の世を去るといふことであります。⁽²²⁾」と述べ、具体例としてパウロ、クロムウェル、カーライル、二宮金次郎、メリー・ライオン等を挙げている。

ここで単に「高尚なる生涯」とは言わず、「勇ましい」という言葉が加えられているのが興味深い。内村が述べているそのような「生涯」の内容から言って、世の人々を「勇気づける」ことこそ、最大の贈物と考えられていたことは間違いないであろう。単に「高尚なる生涯」ではなく、「勇ましい高尚なる生涯」が、世の人々に最も大きな感動を与え、勇気づけるのである。

但し、「勇ましい(だけの)生涯」では又、それを見て「勇気づけられる」ということは起こらない。「勇気づける」ことのできる真に勇気ある生き方は、やはり「勇ましい高尚なる」ものでなければならぬのである。周知の通り内村は、矢内原忠雄等多くの優れた人物を世に送り出したが、これは、内村自身が真に勇気ある生き方をしたからに他ならないであろう。

「勇気づけ」は、普通自明のこととして見過ごされやすいが、このように決して見過ごすことのできない重要な事実である。これは、又当然教育にとって考えなければならない大きな問題である。

ロロ・メイは、次のように言っている。「勇気は、人が成長し、前進し続ける限り、誰にとっても基本的な徳である。⁽²³⁾」又次のようにも言う。「勇気は、時あって起こる、自分の自由を守る為の重大な決断において必要なだけでなく、自由と責任を持って行動しうる人間へと自分を築いていく過程において煉瓦を一つずつ積んでいくような刻々の小さな決断においても要

求される。⁽²⁴⁾」

このように言えるのであれば、まさに「勇気づけ」は、教育にとって必須のものであり、教育の働きの核心であると言ってもよいであろう。「勇気づけ」は、「教育の一つの原理」(H. Henz)⁽²⁵⁾、「教育学的行為の一つの原理」(H. Danner)⁽²⁶⁾であると言われるが、子どもの人格とその自己活動性を何よりも尊重する教育であれば、「勇気づけ」は、教育の一つの原理と言うよりも、教育の第一の原理と言っても言い過ぎではないであろう。子どもを信頼して見守る場合であれ、子どもに何か働きかける場合であれ、「勇気づけ」ということが第一に考えられなければならない。そしてその為には、何よりもまず教育する者自身が、勇気ある生き方をしていなければならないであろう。そうでなければ、いかなる教育的態度も行為も生きた力を持たない。教育する者の「勇気ある生き方」は、子どもとの間で「勇気づけ」となって響き合い、又子ども同士においてもそれが響き合い、影響を与え合うのである。教育を「勇気づけ」の原理から見直すことは、極めて重要であると思われるが、これについては又稿を改めて述べることにしたい。

(七)

更にもう一つの点は、ティリッヒの「勇気」論で述べた「勇気と超越」の問題である。「勇気」は、ニーチェの「勇気」に典型的に見られるように、他に依存しない主体的あり方である。しかしティリッヒにおいて見たように、主体的あり方を徹底させつつ、なおかつ自己の誠実さ(精神的高貴さ)を存在根拠とするあり方を断念し、「受容されることを受容する勇気」が可能であった。主体性を貫く「勇気」と「受容を受容する勇気」は、矛盾するものではない。むしろ前者は、後者への方向を含んでおり、又後者は前者なしにはありえない。

ティリッヒは、しかし更にこの「受容を受容する勇気」の力は、「超越」つまりティリッヒの言う「神を越える神」あるいは「存在それ自身」に根差していると述べている。確かにこれが認められなければ信仰のあり方としては不十分である。とは言え、「勇気」はそもそも自分自身の内からということではなければ意味をなさない。これは、どう考えればよいのか。ここで一つの例を取り上げて考えてみたい。

「重障児を持つ母親と念仏医者との往復書簡集」という副題のついた『大きな手のなかで』という本の中で、念仏医者と言われる米沢英雄氏は、次のように言っている。「おたずねの『救い』というのは何も楽になることではないのです。みんな救われると楽になるように思っておりますが、そんな麻薬をのむような話とはちがう。救いとは、苦難を逃げずに受け、その中で生きぬく力が生まれてくることです。⁽²⁷⁾」又次のようにも言う。「与えられたものを宿業として……身に引き受けて生きぬかせていただく、この生きぬく力を不思議に私たちに与えられております。にもかかわらず私たちはそれを見くびっている、そして何か他の力、他人にたより、すがるとどうかなるように思っている、そして右往左往する、これを迷いと申します。⁽²⁸⁾」

「苦難を逃げずに受け、その中で生きぬく」というのは、他に頼ることを一切やめ、ただひ

たすら自分の内なる力（その中核にあるのは「勇気」であろう）をふるい起こすことに他ならない。しかしまさに自分の内なる生きぬく力が不思議に与えられていることに気づくのである。実際に、米沢氏の助言とその励ましによって、二人の重障児を持つ母親は、逃げ惑うどうしようもない自分自身を受け入れると共に、二人の子どもをまともに受けとめられるようになる。その為には、一般的な価値観、幸福観を次々手放さなければならなかったであろう。それには大きな勇気が必要であったに違いない。しかし遂に全てを感謝して受けとめられる信仰の世界に入ることができたのである。

「生きぬく力が与えられる」というのは、決して自分をわざわざ低くして言っている言葉ではない。自分の内からの力を全部出し切る時に、今迄見えなかったものが初めて見えてくるのである。その内からの力が、思ってもいなかったような大きな力であることに気づくのである。自分の内からの力が、そのまま不思議に与えられたものであることに気づくのである。これは、矛盾のように見えるが、しかし自覚における深い真実であると言えよう。ティリッヒが、信仰の「勇気」の力は、「神を超える神」、「存在それ自身」に根差していると言っているのは、おおよそ以上のような方向で考えてよいであろう。

「勇気」は、自分自身の内からのものであるが、しかし深い自覚においては、単に自分の力とは言いがたいものなのである。

(八)

既に見たように、「勇気」を表す *courage*（特に語源の *cor*）や *cœur*, *Mut* は、心ないし心臓を意味し、又心や心臓を表す *heart* や *Herz* は、「勇気」を意味するというのは、興味深い事実であるが、これは、ロロ・メイが言うように、心臓が身体のあらゆる所に血液を送ってそれらを生かすように、「勇気」は心のあらゆる徳を生きたものにするということであろう。「勇気」は、単にあれこれの徳のうちの一つというより、あらゆる徳の根本にあるものと考えられるのである。

とは言え「勇気」は、確かにプラトンの四元徳をはじめとして、他の徳と並べて考えられることが多い。しかし他の徳と同じように単独に「勇気」だけをめざすと、かえって「勇気」の本質を失うことになるのではないだろうか。というのも、「勇気」だけがめざされると、そこには確かに自分が傷つくことや損失を恐れない勇敢さが見られるにしろ、道義的なものが二義的なものになるのである。従ってそれによって他の者が「勇気づけられる」ことは起こらない。例えば、何かをすることによって「勇気」を競い合うような場合、互いに影響を受け合うことはあっても、それは「勇気づけられる」ということではない。先にも述べたように、真に「勇気づけ」を与えるものが「勇気ある生き方」である。上のようなものは「勇ましさ」であっても、「勇気」ではない。「勇気づけ」を与える「勇気」は、単なる「勇ましさ」ではなく、やはり内村の言う「勇ましい高尚なる生涯」、つまり道義的に生きるという「勇気」であろう。それは、いわば「保身的あり方」（いわゆる「我執」）から道義（徳、道理）に生きることへの

飛躍（の力）であると言えよう。

「勇気」は、何らかの道義と結びついており、その結びついたものを生かす働きである。それは、「保身的あり方」（我執）を脱するということによって道義を生かすのである。とすれば、やはり「勇気」は、他の徳と並ぶ一つの徳というより、それら一切の根本にあって働くものと考えてよいであろう。

ここで「保身的あり方」（我執）というのは、E. フロムの有名な著書『自由からの逃走』“*Escape from Freedom*”が示すように、自由の不安から逃れ、何かに頼り、それにとらわれることであるとも言えよう。フロムによれば、人間は、自然（環境世界、本能）の絆から自由になり、又特に現代では社会（組織、規範）の絆から自由になったが、その自由の深刻な不安に耐えられず、そこから逃れ、何かに依存し、それにとらわれるのである。人間のさまざまな問題は、一つにはこの「自由からの逃走」としての「保身的あり方」に根差していると考えられる。このような「保身的あり方」は、根本的に、ニーチェが「人間という苦痛」と言った「深淵のめまい」、あるいはティリッヒの言う「非存在の脅かし」に対する保身であると言ってよいであろう。

「保身的あり方」は、確かに所有欲や権勢欲、あるいはその他の欲求の形をとることが多いが、しかし根本にはやはり安心への欲求があるであろう。普通安心は、「勇気」とは全く別ものように見られる。それ故に、「勇気」とは反対の方向に安心が求められがちである。しかし真の安心は、むしろ「勇気」なしにはありえない。真の安心は、極端な言い方をすれば「矢でも鉄砲でも持って来い」というように「肚がすわる」とかあるいは「（神の）み心のままに」という「全託」から生まれるものであろう。それは、何が来ても受けとめられる開かれた心であり、「勇気」なしにはありえないのである。「勇気」なしの安心は、何か力あるものを所有するなり、何かに所属するなり、要するに必ず何かに依存することであり、又その何か^が失われはしないかという潜在的な不安の故に、その何かへの「とらわれ」が強固になるのである。その安心は、「とらわれ」の強固さによるものであり、真の安心ではない。

「勇気」は、生命的躍動と道義への志向性が一つになったものであるということを見て来たが、このような「勇気」が人間の生のダイナミックな中核をなしているとすれば、このことは、人間を考える上で極めて重要である。もしも人間を、精神と衝動、理知と欲望というように二元対立的にとらえるならば、両者の間でいわばどう折り合いをつけるかが一番の問題になるが、しかし「勇気」が、生の中核であるとすれば、この「勇気」をどう「養い育てる」かが、人間の第一の問題になる。但しそれは、先に見たように、単に「勇ましさ」をめざすというようなことではない。それではかえって「勇気」の本質を失わせるのである。孟子が、「浩然の気は、義を行ったのが積み重なって発生したものである」と言っているように、「勇気」も又、道義的行為を積み重ねていくことによって、つまり本気で生きることを日々実践することによって「養う」ことができるのではないだろうか。

しかし日々の生活は、確かに「勇気」を萎えさせるものであふれているとも言えよう。従っ

て、他者による「勇気づけ」が何としても必要である。周りにいる本気で生きている者に接することによって勇気づけられるが、又たとえ周りにそのような者がいなくても本気で生きている人の生き様に何らかの形で触れることによって勇気づけられるのである。ともかく「勇気づけ」は、人間関係の根本問題であると言っても言い過ぎではないであろう。

何事によらず「勇気」なしには、全力を尽すことはできない。そして全力を尽す時に、初めて自分の内に思いがけない大きな力があることに気づくのである。それは、自分の内なる力であるが、単に自分が生み出した力とは思えない。それは、「不思議に与えられている」としか言いようのない力である。「勇気」を奮い起こし、全力を尽す時に、自分の内から生じた力の大きさに驚き、感謝と敬虔な思いを持つということは、決して珍しいことではないであろう。自分の内からの思いがけない大きな力に驚くことと「大なるもの」に生かされていることに気づくこととは、決して別のことではないであろう。

註

- (1) Rollo May, "The Courage to Create" (W. W. Norton & Company) p. 13.
- (2) 『ラケス』(生島幹三訳, 『プラトン全集7』所収, 岩波版1975年) 107頁~166頁。『国家』(藤沢令夫訳, 『プラトン全集11』所収, 1976年) 特に285頁~288頁参照。
- (3) 『ニコマコス倫理学』(加藤信朗訳, 『アリストテレス全集13』, 岩波版1973年) 55頁。86頁~97頁参照。
- (4) O. F. Bollnow, "Wesen und Wandel der Tugenden" (ein Ullstein Buch) S. 80ff. 参照。
- (5) F. Nietzsche, "Also Sprach Zarathustra" (Sämtliche Werke, Kröner Verlag) S. 49.
- (6) Ibid., S. 210.
- (7) Ibid., S. 172f.
- (8) Ibid., S. 11.
- (9) P. Tillich, "The Courage to Be" (Yale University Press) p. 3.
- (10) Ibid., p. 1.
- (11) M. Heidegger, "Was ist Metaphysik?" (Vittorio Klostermann) S. 34.
- (12) P. Tillich, Ibid., p.164. "the courage to accept oneself as accepted in spite of being unacceptable."
- (13) Ibid., p. 164.
- (14) W. Loch, "Pädagogik des Mutes" (in: "Erziehung in anthropologischer Sicht" Morgarten Verlag) S. 142.
- (15) Ibid., S. 142.
- (16) Ibid., S. 167.
- (17) 「勇」の「解字」として、「力が意符。甬が音符で、また、わき出る(涌)の意がある。原義は、わき出る力の意。」(『新漢和辞典』大修館書店132頁)とある。
- (18) 西谷啓治, 『根源的主體性の哲学・正』(『西谷啓治著作集第一巻』) 所収, 創文社) 149頁。
- (19) 『哲学大辞書』(同文館) 2835頁。
- (20) 『孟子』(貝塚茂樹訳, 『世界の名著3』) 所収, 中央公論社) 434頁。
- (21) 内村鑑三, 『後世への最大遺物・デンマルク国の話』(岩波文庫) 所収。

- (22) 上掲書51頁。
- (23) Rollo May, "Man's Search for Himself" (W. W. Norton & Company) p. 224.
- (24) Ibid., p. 229f.
- (25) Vgl. H. Henz, "Ermutigung—ein Prinzip der Erziehung" (Freiburg, 1964)
- (26) Vgl. H. Danner, "Ermutigung—ein Prinzip pädagogischen Handelns." (in: "Kind und Welt" Athenäum Verlag) 高根雅啓, 『ヘルムート・ダンナーにおける「勇気づけ」』(『関西教育学会紀要第19号』所収) 参照。
- (27) 米沢英雄・吉村かほる, 『大きな手のなかで一重障児を持つ母親と念仏医者との往復書簡集一』(樹心社) 53頁。
- (28) 上掲書15頁。

以上

(原稿受理1998年9月30日)